

「H∞L Gallery の運営と有効活用についての報告」

— 学内における学生の作品展示とアーティストを招聘したワークショップの開催について —

池田 拓馬

要旨

八戸学院大学短期大学部幼児保育学科棟に筆者が設置した「H∞L Gallery (ホールギャラリー)」では毎年、学生の作品展示や国内外のアーティストを招いたワークショップなどの活動を行っている。学生の作品展示ではお互いの作品を相互に鑑賞する機会を設けることで、それぞれの作品の特徴や個性ある表現を感じ、個々のアイデアや思いを知るきっかけとなり、アーティストを招聘したワークショップや作品展示においては、現代アートの多様な捉え方を体験することを目的としている。そのH∞L Gallery での2022年度における活動報告をまとめる。

キーワード：オルタナティブスペース | ワークショップ | アーティストインスクール

1. 目的

八戸学院大学短期大学部幼児保育学科棟に設置している「H∞L Gallery (ホールギャラリー)」の運営と有効活用を研究テーマとして、これまで学生の作品展示や国内外のアーティストを招いたワークショップなどの活動を行ってきた。学生の作品展示ではお互いの作品を相互に鑑賞する機会を設けることで、それぞれの作品の特徴や個性ある表現を感じ、個々のアイデアや思いを知るきっかけとなり、アーティストを招聘したワークショップや作品展示においては、現代アートの多様な捉え方を体験することで、一見無用に見えるものの中に新しい価値を見出すことを目的としている。

行ってきた。主な内容は下記となる。

7月	七夕飾り吹流しの展示、笹の壁画と七夕飾りの展示
9月	まぜ色で心を描こう、学生作品の展示
10月	りんごのデッサン、もやしの水彩画の展示
学生祭	染め紙を用いたフラッグの展示 壁面装飾の展示
11月	オリジナル名前絵本の展示
12月	オリジナルクリスマスカードの展示 クリスマスオーナメントの制作と飾り付け クリスマスツリーの展示 (マリア像前)
1月	美術Ⅱ選択学生による油絵の展示 中村研一によるワークショップ及び作品展示

2. 2022 年度の活動内容

2022 年度においては学生の作品や現代美術作家の作品展示ワークショップなど計15回

2-1 七夕飾り吹流しの展示、笹の壁画と七夕飾りの展示

7 月には七夕飾りの制作に合わせギャラリーの壁面に竹や笹の絵をワークスタディーの学生と共に描き、そこに美術 I の講義にて制作した七夕飾りと願いをこめた短冊を学生自らの手で飾った。また同じく講義内で制作した七夕飾り吹き流しも学生ホールに飾り付けた。2022 年度も新型コロナウイルス感染症の影響で、八戸七夕まつりが中止となり、学科内で計画していた行事も中止となる中で、少しでも学生生活のなかに季節を感じられるよう配慮した。短冊には、「感染症が収束したらライブに行きたい」「資格取得を頑張る」など学生や教員の希望やコロナ収束に対する思いが書かれていた。



図 1 笹の壁画



図 2 吹き流しとギャラリー



図 3 短冊と七夕飾り

2-2 まぜ色で心を描こう、学生作品の展示

9 月にはクレヨンで描いた「まぜ色で心を描こう」という課題の作品展示を行った。本課題は自由な円、もしくは線が閉じた図形を描き、その中を自由に塗りつぶすことから始まり、その後「もしこれが自分の心であったらどんな感情か」と問い、その思いを題名として記入する。そのことによって、心と言う抽象的な存在を色や形に置き換え考えるという実験的な絵画描法をとっている。展示された状態はまるで学生たちの普段口には出さない思いが空中に浮かんでいるような風景となった。



図 4 「まぜ色で心を描こう」作品の飾られた様子



図 5 「まぜ色で心を描こう」作品の飾られた様子 別角度

2-3 りんごのデッサン、もやしの水彩画の展示

1 年生後期の選択科目である美術Ⅱでは、聴講生も併せ 2022 年度は 8 名の履修者があった。美術Ⅱの講義で制作したりんごのデッサンともやしの水彩画をギャラリーの内側に展示した。りんごのデッサンでは色や形に意識が行きがちになるが、赤などの色に惑わされずに陰影を十分に意識して描くことで立体感のある写実に近い絵を描くことができることを実演も交え教えることで、それぞれ素晴らしいデッサンを描くことができた。

またもやしの水彩画では実寸に描くことで写実的な描画ができるよう工夫した。絵を描く際はほとんどの場合、実物の大きさを画面や描画材の都合に合わせ、脳内で拡大縮小を行い画面に描くという難しさがある。さらに 3 次元の立体を平面の 2 次元へ変換することも大変難しい作業となる。それとは逆に実物大に描き、ほとんど立体感のないもやしをモチーフに選ぶことで純粋な水彩表現に集中することができる。もやしを自分の名前と同じように並べ透明水彩で描き、展示を行った。



図 6 りんごのデッサン



図 7 もやしの水彩画制作の様子



図 8 もやしの水彩画とりんごのデッサン展示の様子

2-4 学生祭

染め紙を用いたフラッグの展示
壁面装飾の展示

10 月に行われた学生祭に合わせ学生ホールと幼児保育学科棟 1 号館の階段付近を学生の作品によって装飾した。学生ホールには幼

児美術Ⅰの講義内で折り染めした和紙から制作したフラッグを89名分繋ぎ合わせ天井全体に吊るし展示した。一つひとつの作品は1メートル程度の作品だが、100名近い学生の作品を繋ぎ合わせることで大きな作品となり空間全体を華やかな雰囲気に変えることができた。



図 9 染め紙を用いたフラッグの展示

また壁面装飾も同じ講義内で制作した学生の作品をガラス面に展示した。この制作に関してはほとんど筆者は指導を行わず、好きな装飾を作るといって伝え、学生は黙々と制作を始め完成させることができた。技術的に困っている学生には適宜指導を行ったが、このような保育の現場に直結するような技術や制作に関しては、学生たちの意識や意欲の高さが伺えることがわかった。また学生祭にあわせ行ったことで多くの人の目に触れることができ他の学生祭の催し物と合わせ、空間を華やかに装飾することができた。



図 10 壁面装飾の展示(幼児保育学科棟 1 号館)



図 11 壁面装飾の展示(幼児保育学科棟 1 号館)
別角度

2-5 オリジナル名前絵本の展示

1 年生後期の児童文学Ⅰの講義で例年制作されている名前絵本をギャラリーの内側に展示した。筆者は児童文学Ⅰ、15 回の講義の内 5 回を絵本作りとして担当し、表紙や本文の作り方を指導した。学生の制作意欲を高めることを狙いとし本格的な本の装丁に近い作り方を厚紙と色画用紙で制作できるように教材を作成した。壁面装飾の制作と同様にこのような制作に関しては、教員よりも学生の方が意識も技術も高く想定の外ではほとんど指導を必要としなかった。どうしてもアイデアが思い浮かばない学生や飛び出す絵本の仕組みなど特殊な技術を要する場合以外は学生たちの自主制作に近い形となった。

できあがった作品をギャラリーに展示することとし、壁面に展示できるように木材で棚を特別に制作し絵本の表紙が一堂に見えるようにした。それぞれの学生が意欲的に制作したこともあり、他の学生が制作した作品の内容や技術等に興味が強く、休憩時間などにそれぞれ鑑賞し合う姿が見られた。棚の技術的な問題としては、絵本の厚みによっては前に倒れてきてしまうものもあり、今後改善が必要と感じた。



図 12 絵本の展示 棚の制作の様子



図 13 オリジナル名前絵本の展示



図 14 オリジナル名前絵本の展示 別角度

2-6 オリジナルクリスマスカードの展示

クリスマスツリーの展示（マリア像前）
クリスマスオーナメントの制作と飾りつけ

12 月には季節行事であるクリスマスに合わせて各講義で制作した作品を飾りつけた。幼

児美術 I の講義内で制作した、オリジナルクリスマスカードはギャラリーの外側の壁面に展示し、同じく幼児美術 I の講義内で制作したステンシル技術を用いたクリスマスツリーはマリア像の周囲に展示した。また、ゼミナール II と IV の講義内で制作したオーナメントは校内に飾られていたクリスマスツリーに飾り付けを行った。

クリスマスカードは画用紙に千枚通しで穴を開けそこに大きめの針を用いて毛糸を縫いながら模様を描く技法である。それぞれ具体的な人物を思い浮かべメッセージを書くことを促しギャラリーに展示する際は、麻紐と木製のクリップを用いることにより、クリスマスまでに学生たちが展示場所から自身で持ち帰りメッセージを宛てた人物に渡せるように配慮した展示方法をとった。



図 15 オリジナルクリスマスカードの展示の様子



図 16 オリジナルクリスマスカード 麻紐とクリップでの展示



図 17 ステンシル技法を用いたクリスマスツリー



図 18 クリスマスオーナメント制作の様子



図 19 クリスマスオーナメントを飾りつけた様子

マリア像の周囲に展示した作品は白の画用紙に 3 つの三角形を描きそこに切った型紙とクレヨンで擦り出すことで簡易的なステンシル技法を使った描画を行った。さらに立体的に組み合わせることですりとした。校内にあった幼子を抱いたマリア像の彫刻は、イエスの誕生を祝う行事であるためか、ステンシルを用いたクリスマスツリーの作品と、と

ても相性が良く学生の作品とともにクリスマス彩ることとなった。

さらにゼミナールではオーナメントを制作を行った。球体の発泡スチロールに様々な柄のナフキンをボンド水で貼り付けリボンを巻きオーナメントを制作した。オーナメントは 1 号館に飾られていたクリスマスツリーに自分たちの手で飾り付けを行った。

2-7 美術Ⅱ選択学生による油絵の展示

選択科目である美術Ⅱを履修した学生 5 名と、履修はできなかったが聴講生として参加した業務委託生 2 名、計 7 名による油絵の展示を行った。講義内では実際に自分達の手で木枠の組み立てとキャンバスを張る作業から始めた。油絵の描画に関しては工程を簡略化させるためにモデリングペーストなどで下地を作った。自分達の手でキャンバスを張る意図としては通常、絵は描くことから始めるが支持体の準備から始めることで制作へのモチベーションを高めるねらいがある。それぞれ持ち寄ったモチーフの写真をもとに油絵を描き最終的に額縁を同じく自分達の手で作り額装し展示した。ほとんどの学生が油絵初心者であったが力強く美しい画面を描くことができ、受講していない学生にも選択科目の活動の様子を紹介することができた。

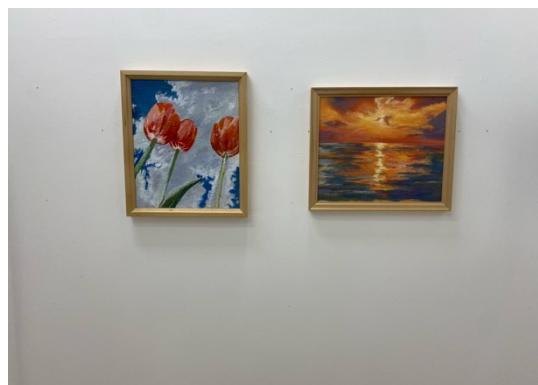


図 20 油絵作品の展示



図 21 油絵作品の展示 別角度

2-8 中村研一によるワークショップ及び作品展示

1 月には現代美術作家の中村研一を招聘し滞在制作及びワークショップ、作品展示を行った。中村は校内の雑木林等に落ちている木の枝や植物などから着想を得て、「2 月の美保野の雪の上と下」と題した作品を制作した。



図 22 中村研一滞在制作の様子

ギャラリーの白い壁面を積もった雪と見立て、そこに木の枝などを構成して配置することで雪に埋もれる木々を表現し、実際に雪の下で眠っていた植物を掘りおこし、麻布で土とともに包むことで雪の下で春を待つ植物たちを擬似的に表現した。美保野の雪の下に眠るものたちをギャラリーの内部に可視化することを試みた。

またワークショップでは学生たちが自ら拾い集めた石と枝を用いてアクセサリラックとなるオブジェを制作した。石に特殊なドリルで穴を開け、そこに接着剤とともに枝を

挿し、枝を絵の具やテープなどで装飾した。また紙粘土と実際の種子を用いて、今まで出会った人とこれから出会う人に贈るというコンセプトをもとにアクセサリを制作しオブジェに飾り付けた。それらの作品を学生たち自らギャラリーの壁面に位置を決め展示作業を行った。

中村のコンセプトとワークショップの制作過程はこれまでギャラリーで行ってきたワークショップなどに比べると学生たちにとっては難解に感じる部分もあったが、学生たちは制作を始めると目の前にある素材や隣で制作される学生同士の作品に影響を受けながら楽しんでいる様子が伺えた。



図 23 中村研一 ワークショップ制作風景 1



図 24 中村研一 ワークショップ制作風景 2



図 25 中村研一 ワークショップ作品展示の様子



図 26 中村研一 ワークショップ成果作品



図 27 中村研一「2月の美保野の雪の上と下」

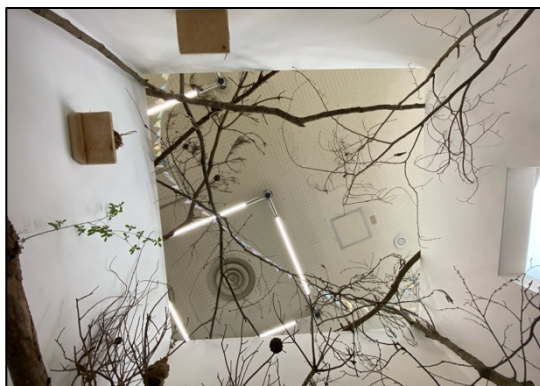


図 28 中村研一「2月の美保野の雪の上と下」別角度

3. まとめ

2022 年度の研究活動を通じ季節に応じた展示内容を替えていく事は大変難しい作業だが、学生たちがお互いに作品を鑑賞し合える環境と、常に自分達の作品が学生生活の中に存在する意義は大きかったのではないだろうか。

また一見難しいであろう現代美術という概念にも楽しみ、遊びながら順応する学生たちの資質はまさに、環境を通じた保育、遊びを通じた発達を支える保育士としての資質そのものであるのではないだろうか。今後もギャラリーという機能を活かし、学生の作品展示やワークショップ、現代美術の作品展示などを計画していきたい。

謝辞

本研究実施にあたり滞在制作を快諾いただき、出品及びワークショップの実施をいただいた中村研一氏、ワークショップに取り組んでいただいた池田ゼミナール学生の皆さん、講義を通じて作品の制作と提供をいただいた幼児保育学科の学生の皆さんには感謝の意を表します。八戸学院大学短期大学部後援会、八戸学院大学短期大学部教職員の皆様には本研究活動にご理解とご支援をいただき心より感謝申し上げます。野場来海さん、金子瞳さんにはワークスタディとして作品の展示や様々な準備のサポートを行なっていただき本当にありがとうございました。

また本研究の実施にあたっては令和4年度八戸学院大学短期大学部後援会特別助成を受けました。

執筆者紹介（所属）

池田 拓馬 八戸学院大学短期大学部
幼児保育学科 准教授